

タカラバイオ株式会社
2019年3月期第2四半期決算説明会 主要質疑応答内容

開催日：2018年11月8日（木）

於：野村證券株式会社 日本橋本社講堂（東京都中央区）

回答者：代表取締役社長 仲尾 功一、取締役副社長 松崎 修一郎

11月6日発表の通期業績予想で、バイオ支援事業の売上高予想を下方に修正された理由を説明下さい。また、今後どのようにカバーされる計画でしょうか。中期経営計画の達成に影響があるのでしょうか。

- バイオ産業支援事業は、①研究用試薬、②理化学機器、③受託の3つに区分されますので順を追って説明します。
- ①研究用試薬では、特に日本で苦戦が続くと予想しています。顧客の大部分を占めるアカデミアの研究予算が厳しく、売上が伸び悩んでいます。これは構造的な問題で、当社の努力でただちに回復というわけにはいきません。民間分野ではPCRを利用する検査分野（アプリフィールド）が出遅れていましたが、こちらは下期に入って回復基調にあります。また、米国や欧州では、NGS（次世代シーケンサー）関連製品が好調で、業績を牽引していますが、日本では、当社自身がNGSを使用した受託サービスを展開していることから、NGS関連製品の内部消費も大きいいため、外部売上につながりにくく、国内苦戦の一因と考えています。
- ②理化学機器の修正理由ですが、旧 WaferGen 社の新製品の発売開始が出遅れたのが原因です。先端研究向けの製品ですので、下期にただちに取り戻すのは難しいですが、丁寧に販促活動を行い、今後の売上拡大につなげたいと考えています。
- ③受託については、CDMO分野が好調です。今期より遺伝子医療事業で使用する治験薬の製造が本格化していますが、受託で利用する施設・要員と重複しているため、現在の製造能力では、一部の受託サービスについては、受注量に限度があります。治験薬は提携先への有償提供となりますが、遺伝子医療事業の売上として計上されています。治験薬の売上を加えると、受託については実質的には期初予想を上回る見込です。
- 受託、治験薬の製造能力を増やす目的で、2019年12月稼働予定で新施設の建設を進めています。
- 上記の説明に加え、健康食品事業の譲渡などに伴う収益減などの要素はありますが、その他の事業でカバーできる予定で、現時点では、下期の修正は、中期経営計画の達成に影響はないと考えています。

レトロネクチンの今後の売上をどのように予想していますか。

- CD19・CAR などの遺伝子・細胞治療薬の承認が始まり、世界的に開発も拡大しています。これに伴いレトロネクチンの販売量が増加しています。
- ライセンス先は 11 社にのぼり、この中には実際に商業化された製品を持っている企業もあります。具体的な規模感は申し上げにくいですが、引き続き、ライセンス先数、売上ともに増加すると予想しています。
- レトロネクチンは、当社の遺伝子医療事業のプロジェクトやCDMOサービスにおいても、遺伝子導入細胞を作製する際に使用していますので、実質的には、外部の売上高以上の使用量となっています。
- このような状況ですので、将来の需要に備えて製造体制の整備を進めています。

C-REV について、今回、学会で日本の第Ⅱ相臨床試験データを発表されていますが、C-REV の承認申請に変更は無いでしょうか。

- データについては、先ほど申し上げた通り*です。提携先や当局と相談しながら先に進めています。
- 申請計画の変更はありません。

*決算説明会プレゼン資料
P24-28 をご参照下さい。

TCR の海外展開について、どのようにお考えでしょうか。

- NY-ESO-1・siTCR については、独自の知財が海外でも確保できており、海外展開を検討しています。
- このために、海外での投与実績も重要であると考えて、カナダで医師主導治験を進めています。
- カナダの治験結果については、ASCO2019（米国・2019 年 5－6 月）での発表を検討しています。

以上